

初級編

子供たちに
声に出して読んで、
覚えてほしい・書いてほしい
作品集

広島県教育委員会



《初級編 目次》

花がふつてくると思う・	八木重吉	1	花のき村と盗人たち・	新美南吉	24
果物・	八木重吉	2	野ばら・	小川未明	25
おおぞらのこころ・	八木重吉	3	湖水の女・	鈴木三重吉	26
ある時・	山村暮鳥	4	いろは歌・		27
雲・	山村暮鳥	5	俳句・		28
こども・	山村暮鳥	6	春の七草・		29
蝶々・	山村暮鳥	7	秋の七草・		30
りす、りす、小りす・	北原白秋	8	十二月月・		31
夕日・	葛原しげる	9	竹取物語・		32
お月夜・	北原白秋	10			
雪・	山村暮鳥	11			
砂山・	北原白秋	12			
とんび・	葛原しげる	13			
山の月夜・	北原白秋	14			
五十音・	北原白秋	15			
竹・	萩原朔太郎	16			
冬が来た・	高村光太郎	17			
手袋を買いに・	新美南吉	18			
木の祭り・	新美南吉	19			
赤いろうそくと人魚・	小川未明	20			
牛をつないだ樅の木・	新美南吉	21			
狐・	新美南吉	22			
赤い蠟燭・	新美南吉	23			

花がふつてくると思うおも

八木重吉やぎじゆうきち

花がふつてくると思うおも

花がふつてくるとおもう

このてのひらにうけとろろうとおもう

くだもの
果物

やぎじゆうきち
八木重吉

あき
秋になると

くだもの

果物はなにもかも忘れてしまつて

わす

うつとりと実のつてゆくらしい

み

おおぞらの ころ

やぎじゆうきち

八木重吉

わたしよ わたしよ

はくちよう

白鳥となり

らんらんと 透すきとおって

おおぞらを かけり

おおぞらの うるわしいころにながれよう

ある時

やまむらぼちよう
山村暮鳥

もくれん

木蓮の花が

ぽたりとおちた

まあ

なんという

明るい大きな音だつたろう

さようなら

さようなら

雲 くも

やまむら ぼちよう
山村暮鳥

おうい雲よ くも

ゆうゆうと

ばかにのんきそうじやないか

どこまでゆくんだ

いわきたいら
ずっと岩城平のほうまでゆくんか

子ども

やまむらぼちよう

山村暮鳥

ぼさぼさの

いけがき

生籬の上である

ぼたん

牡丹でもさいているのかと

おもったら

まあ、子どもが

わらっていたんだよう

ちようちよう

蝶々

やまむらぼちよう

山村暮鳥

青空たかく

たかく

どこまでも、どこまでも

ま

舞いあがっていった蝶々

ちようちよう

ちようちよう

あの二つの蝶々

あれつきり

もうかえっては来なかつたか

りす、りす、小りす

北原白秋
きたはらはくしゅう

りす、りす、小りす、
ちよろちよろ小りす、
あんずの実^みが赤いぞ、
たべたべ、小りす。

りす、りす、小りす、
ちよろちよろ小りす、
さんしよの露^{つゆ}が青いぞ、
のめのめ、小りす。

りす、りす、小りす、
ちよろちよろ小りす、
ぶどうの花が白いぞ、
ゆれゆれ、小りす。

夕日

くずはら
葛原しげる

一、ぎんぎん ぎらぎら 夕日が しずむ

ぎんぎん ぎらぎら 日が しずむ

まっかつかつか 空の くも

みんなの おかおも まっかつか

ぎんぎん ぎらぎら 日が しずむ

二、ぎんぎん ぎらぎら 夕日が しずむ

ぎんぎん ぎらぎら 日が しずむ

からすよ お日をおっかけて

まっかに そまっつて まっつて こい

ぎんぎん ぎらぎら 日が しずむ

お月夜 つきみや

きたはらはくしゅう
北原白秋

ト ト ト
ン、ン、ン、
あけてください。
どなたですか。
わたしたちは木の葉よ。
ト、ン、コトリ。

ト ト ト
ン、ン、ン、
あけてください。
どなたですか。
わたしたちは風です。
ト、ン、コトリ。

ト ト ト
ン、ン、ン、
あけてください。
どなたですか。
月のかげです。
ト、ン、コトリ。

雪 ゆき

やまむらぼちよう
山村暮鳥

きれいな

きれいな

ゆき
雪だこと

はたけ
畑も

やね
屋根も

まつ白だ

きれいでなくって

どうしましろう

ゆき
天からふってきた雪だもの

砂山 すなやま

北原白秋 きたはらはくしゅう

海は荒海、
うみ あらうみ

向うは佐渡よ。
むこ さど

すずめ啼け啼け、
な な もう日はくれた。

みんな呼べ呼べ、
よ よ お星さま出たぞ。
ほし

とんび

くずはら
葛原しげる

一、 飛^とべ飛^とべとんび 空^{たか}高く

鳴^なけ鳴^なけとんび 青空に

ピンヨロー ピンヨロー

ピンヨロー ピンヨロー

楽^{たの}しげに 輪^わをかいて

二、 飛^とぶ飛^とぶとんび 空^{たか}高く

鳴^なく鳴^なくとんび 青空に

ピンヨロー ピンヨロー

ピンヨロー ピンヨロー

楽^{たの}しげに 輪^わをかいて

山の月夜 つきよ

北原白秋 きたはらはくしゅう

白樺 しらかば の幹 みき はしろくて、

月の夜 よる の風 かぜ にひかるよ。

お手々うて、

窓 まど のこどもよ。

白樺 しらかば の幹 みき はしろいよ。

朴 ほお の葉 は のかげはひろくて、

月の夜 よる の土にゆれるよ。

お手々うて、

そとのこどもよ、

朴 ほお の葉 は のかげはひろいよ。

五十音

北原白秋

水馬赤いな アイウエオ
浮藻に小えびもおよいでる

柿の木 栗の木 カキクケコ
啄木鳥こつこつ 枯けやき

大角豆に酸をかけた サシスセソ
その魚浅瀬で刺しました

立ちましょ 喇叭で タチツテト
トテトタッタと飛び立った

なめくじのろのろ ナニヌネノ
納戸にぬめって なにねばる

鳩のぼっぽ ほろほろ ハヒフヘホ
日向のお部屋にや笛を吹く

蝸牛 螺旋巻 マミムメモ
梅の実落ちても見もしまい

焼栗 ゆで栗 ヤイユエヨ
山田に灯のつく宵の家

雷鳥は寒かろ ラリルレロ
蓮花が咲いたら瑠璃の鳥

わい わい わっしよい ワイウエヲ
植木屋 井戸換え お祭だ

竹

萩原朔太郎

光る地面に竹が生え、

青竹が生え、

地下には竹の根が生え、

根がしだいにほそらみ、

根の先より繊毛が生え、

かすかにけふる繊毛が生え、

かすかにふるえ。

かたき地面に竹が生え、

地上にするどく竹が生え、

まっしぐらに竹が生え、

凍れる節々りんりと、

青空のもとに竹が生え、

竹、竹、竹が生え。

冬ふゆが来きた

高村光太郎たかむらこうたろう

きつぱりと冬ふゆが来きた
八やつ手での白しろい花はなも消きえ
いちようの木きもほうきになつた

きりきりともみ込こむような冬ふゆが来きた
人ひとにいやがられる冬ふゆ
草木くさきに背そむかれ、虫類むしるいに逃にげられる冬ふゆが来きた

冬ふゆよ

僕ぼくに来こい、僕ぼくに来こい
僕ぼくは冬ふゆの力ちから、冬ふゆは僕ぼくの餌食えじきだ

しみ透とおれ、つきぬけ
火事かじを出だせ、雪ゆきで埋うずめろ
刃物はもののような冬ふゆが来きた

手袋てぶくろをか買かいに

新美南吉にいみなんきち

(略りやく)

間まもなくほらあなへ帰かえってきた子こぎつねは、

「お母かあちゃん、おててがかつめたい、おててがちんちんする。」

と言いって、ぬれてぼたん色いろになった両手りょうてを、母かあさんぎつねの前まえにさし出だしました。母かあさんぎつねは、その手てに、はあつと息いきをふきかけて、ぬくとい母かあさんの手てでやりわりつつんでやりながら、

「もうすぐあたたかくなるよ。雪ゆきにさわると、すぐあたたかくなるもんだよ。」
と言いいましたが、かわい**い**ぼうやの手にしもやけができてはかわい**い**そうだから、夜よるになったら、町まちまで行いって、ぼうやのおててに合あうような、毛糸けいとの手ぶくろを買かってやろうと思おもいました。

木の祭り

まつ

りやく

(略)

にいみなんきち

新美南吉

なんて楽しいお祭りまつでしょう。ちようちようたちは木のまわりを大きなぼたん雪ゆきのように飛びまわって、つかれると白い花にとまり、おいしいみつをおなかいっぱいごちそうになるのであります。けれど光がうすくなつて夕がたになってしまいました。みんなは、

「もつとあそんでいたい。けどもうじきまつ暗くになるから。」

とため息をつきました。するとほたるは小川のふちへ飛とんでいって、自分じぶんのなかまをどっさり連つれてきました。一つ一つのほたるが一つ一つの花のなかにとまりました。まるで小さいちようちんが木にいっぱいともされたようなくあいでした。そこでちようちようたちはたいへんよろこんで夜よるおそくまであそびました。

赤いろうそくと人魚にんぎよ

小川未明おがわみめい

人魚にんぎよは南みなみの方ほうの海うみにばかりすんでいるのでありません。北きたの海うみにもすんでいたのであります。

北方ほくほうの海うみの色いろは、青あおうございしました。あるとき、岩いわの上うへに、女にんぎよの人魚にんぎよがあがつて、あたりあたりの景色けしきをながめながら休やすんでいました。

雲間くもまからもれた月つきの光ひかりがさびしく、波なみの上うへを照てらしていました。どちらどちらを見てもかぎりない、ものすごい波なみが、うねうねと動うごいているのであります。

なんという、さびしい景色けしきだろうと、人魚にんぎよは思おもいました。自分じぶんたちは、人間にんげんとあまりすがたは変かわっていない。

魚さかなや、また底そこ深い海うみの中にすんでいる、気のあらい、いろいろなけものなどくらべたら、どれほど人間にんげんのほうに、心こころもすがたもにているかしれない。それだのに、自分じぶんたちは、やはり魚さかなや、けものなどといっしょに、冷つめたい、暗くい、気きのめいりめいりうみのような海うみの中なかにくらさなければならぬというのおもは、どうしたことだろうと思おもいました。

牛をつないだ椿の木

新美南吉

山の中の道のかたわらに、椿の若木がありました。牛曳きの利助さんは、それに牛をつなぎました。

人力曳きの海蔵さんも、椿の根本へ人力車をおきました。人力車は牛ではないから、つないでおかなくつてもよかったです。

そこで、利助さんと海蔵さんは、水をのみに山の中には行ってゆきました。道から一町ばかり山にわけいったところに、清くてつめたい清水がいつも湧いていたのであります。

二人はかわりばんこに、泉のふちの、しだやぜんまいの上に両手をつき、腹ばいになり、つめたい水の匂いをかぎながら、鹿のように水のみました。はらの中が、ごぼごぼいうほどのみました。

山の中では、もう春蝉が鳴いていました。

(略)

新美南吉にいみなんきち

ちようど文六ちゃんぶんろくが、新しい下駄げたをはいたときに、腰こしの
まがったお婆さんばあが下駄屋さんげたやにはいつて来きました。そして
お婆さんばあはふとこんなことをいうのでした。

「やれやれ、どこの子こだか知らんが、晩ばんげに新あたしい下駄げたをお
ろすと狐きつねがつくといいうだに」

子供達こどもたちはびっくりしてお婆さんばあの顔かおを見みました。

「嘘うそだい、そんなこと」

とやがて義則君よしのりくんがいました。

「迷信めいしんだ」

とほかの一人ひとりがいました。

それでも子供達こどもたちの顔かおには何か心配しんぱいな色いろがただよっていまし
た。

「ようし、そいじゃ、小母さんおぼがまじないしてやろう」

と、下駄屋げたやの小母さんおぼが口軽くちがるくいいました。

小母さんおぼは、マッチを一本いっぴんするまねして、文六ちゃんぶんろくの新あたし
い下駄げたのうらに、ちよつと触さわりました。

「さあ、これでよし。これでもう、狐きつねも狸たぬきもつきやしん」

そこで子供達こどもたちは下駄屋さんげたやを出でました。

赤い蠟燭

新美南吉

山から里の方へ遊びにいった猿が一本の赤い蠟燭を拾いました。赤い蠟燭は沢山あるものではありません。それで猿は赤い蠟燭を花火だと思ひ込んでしまいました。

猿は拾った赤い蠟燭を大事に山へ持って帰りました。

山では大へんな騒ぎになりました。何しろ花火などというものは、鹿にしても猪にしても兎にしても、亀にしても、鼬にしても、狸にしても、狐にしても、まだ一度も見ただけがありません。その花火を猿が拾って来たというのであります。

「ほう、すばらしい。」

「これは、すてきなものだ。」

鹿や猪や兎や亀や鼬や狸や狐が押し合いへしあいして赤い蠟燭を覗きました。すると猿が、

「危ない危ない。そんなに近よってはいけない。爆発するから。」

といました。

みんなは驚いて後込みしました。

そこで猿は花火というものが、どんなに大きな音をして飛び出すか、そしてどんなに美しく空にひろがるか、みんなに話して聞かせました。

花のき村と盗人たち

ぬすびと

にいみなんきち
新美南吉

りやく
(略)

みんながじぶんを信用してはくれなかったのです。ところが、この草鞋をはいた子供は、盗人であるじぶんに牛の仔をあずけてくれました。じぶんをいい人間であると思ってくれたのです。またこの仔牛も、じぶんをちつともいやがらず、おとなしくしております。じぶんが母牛でもあるかのように、そばにすりよっています。子供も仔牛も、じぶんを信用しているのです。こんなことは、盗人のじぶんには、はじめてのことでもあります。人に信用されるといのは、何といううれしいことでありましょう。……

そこで、かしらはいま、美しい心になつていたのであります。子供のころにはそういう心になつたことがあります。だが、あれから長い間、わるい汚い心でずっといたのです。久しぶりでかしらは美しい心になりました。これはちょうど、垢まみれの汚い着物を、きゆうに晴れ着にきせかえられたように、奇妙なぐあいでありました。

——かしらの眼から涙が流れてとまらないのはそういうわけなのでした。

野ばら

おがわみめい
小川未明

大きな国と、それよりすこし小さな国とがとなり合っていました。とうぎ、その二つの国の間には、なにごともしこらず平和でありました。

ここは都から遠い、こっけい国境であります。そこには両方の国から、ただ一人ずつの兵隊がはけんされて、こっけい国境を定めた石碑せきを守っていました。大きな国の兵士は老人ろうじんでありました。そうして、小さな国の兵士は青年せいせいでありました。

二人は、石碑の建っている右と左に番をしていました。いたってさびしい山でありました。そして、まれにしかその辺へんを旅する人かげは見られなかったのです。

初め、はじたがいに顔を知り合わない間は、二人はてきか味方かというような感じがして、ろくろくものもいけませんでしたけれど、いつしか二人は仲よしなかになってしまいました。二人は、ほかに話をする相手もなくたくいつであつたからであります。そして、春の日は長く、うららかに、頭の上に照てりかがやいているからでありました。

湖水こすいの女

鈴木すずき三重吉みえきち

昔むかしウエイルスというところのある山の上に、さびしい湖水こすいがありました。その近くちかのある村に、ギンという若わかものが、母親ははおやと二人で暮くらしておりました。

ある日ギンは、湖水こすいのそばへ牛うしをつれて行って、草を食たべさせておられますと、じきそばの水の中に、知らない若わかい女の人ひとが一人、ふうわりと立たって、金の櫛くしでしずかに髪かみをすいておりました。下にはその顔かおが、鏡かがみにうつしたように、くつきりと水にうつっておりました。

それを見ると、その女の人は、それは何なんともいいようのない、やさしい美うつくしい女むすめでした。

ギンはしばらくじっと立たって見ておりました。そのうちに、何なんだか、自分の持もっている、大麥おおむぎでこしらえたパンとチーズを、その女の人ひとにやりたくなくなりました。そして、そつと岸きしへ下くだりていきました。

女まは間まもなく、髪かみをすいてしまつて、すらすらとこちらへ歩あるいてきました。ギンは黙だまつてパンとチーズをさしだしました。

女むすめはそれを見ると首くびをふつて、

「かさかさのパンを持もつた人ひとよ。私わたしはめつたにつかまりはしませんよ。」
こういって、いきなり、すらりと水の下へもぐつてしまいました。

いろは歌 うた

いろはにほへと

ちりぬるを

わかよたれそ

つねならむ

う いみのおくやま

けふこえて

あさきゆめみし

ゑ えひもせす

俳句はいく

ぼたんちりてうち重かさなりぬ二三ぺん

与謝よざ
蕪村ぶそん

夏川なつかわをこすうれしさよ手にぞうり

与謝よざ
蕪村ぶそん

かき食くえへばかねが鳴なるなり法隆寺ほうりゅうじ

正岡まさおか
子規しき

いくたびも雪ゆきのふかさをたづねけり

正岡まさおか
子規しき

すずめの子そこのけそこのけお馬んまが通とおる

小林こばやし
一茶いちぢ

うまそうな雪ゆきがふうわりふうわりと

小林こばやし
一茶いちぢ

こがらしや海うみに夕日ゆづりをふき落おとす

夏目なつめ
漱石そうせき

よくみればなずな花さく垣かきねかな

芭蕉はしやう

春の七草

せり

なずな

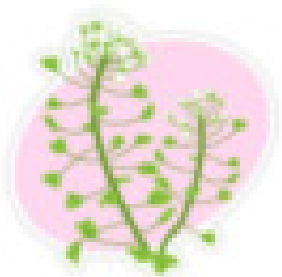
ごぎよう

はこべら

ほとけのざ

すずな

すずしろ



馬でゆく秋の七草ふんでゆく

はせがわそせい
長谷川素逝

秋の七草

はぎの花

おぼな
尾花（すすき）

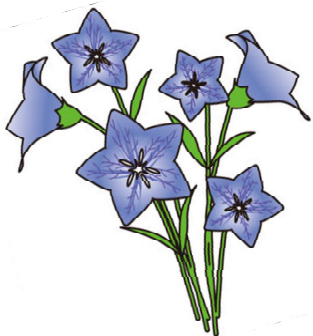
くず
葛の花

なでしこ

おみなえし

ふじ
藤ばかり

ききょう



ふみづき むいか つね よ
文月や六日も常の夜には似ず

ばしょう
芭蕉

しもつき くも ひる ふじ
霜月や雲もかからぬ昼の富士

まさおかしき
正岡子規

十二ヶ月

むつき
睦月（一月）

ふ（み）づき
文月（七月）

きさつらぎ
如月（二月）

はづき
葉月（八月）

やよい
弥生（三月）

ながつき
長月（九月）

うづき
卯月（四月）

かななづき
神無月（十月）

さつき
皐月（五月）

しもつき
霜月（十一月）

みなづき
水無月（六月）

しわす
師走（十二月）

竹取物語

たけとりものがたり

月に帰る場面

かかるほどに、よい うち過ぎて、子の時ばかりに、家の辺り、昼の明さにも過ぎて、光りたり。

もちづきの明さを 十合わせたるばかりにて、在る人の 毛の穴さえ 見ゆるほどなり。大空より、人、雲に乗りて 下り来て、土より 五尺ばかり 上りたるほどに 立ち連ねたり。

内外なる 人の心ども、物におそわるるようにて、あい戦わん心も なかりけり。